

7. 南相馬市 東日本大震災直後の様子と令和元年台風からの復興と派遣職員との懇談

西 修

◇日 時：令和4年12月11日(日) 9:00~12:00

◇場 所：南相馬市小高区役所及び被災現場

◇対応者：南相馬市経済部農林整備課

農地復旧係長 天野 康史

同 副主査 山本 洋二（神戸市派遣）



小高区役所での説明

1. 南相馬市概要

人 口：58,703人(令和3年3月末) ※震災時 72,000人

世帯数：24,208世帯

面 積：398.58 km²

うち約55%が森林 約21%が農用地

- ・平成18年1月1日に旧鹿島町、旧原野市、旧小高町が合併して誕生（旧町を区と称している）
- ・いわき市と宮城県仙台市の間に位置する浜通りの中核都市



2. ヒアリング内容

(0)天野係長の自己紹介

- ・原町地区在住、小高区出身で旧小高町採用、実家は小高地区にある。
- ・農林整備課農地復旧係長として東日本大震災や水害後の後の農地や農業施設の復旧を担当している。
- ・H10年採用で24年目になる。

(1)連続した自然災害による災害の状況

- ・平成23年の東日本大震災以降、令和元年の豪雨、令和4年の福島県沖地震と、立て続けに被災している。復旧が終わらないうちに次の災害がやってきた状況。昨年からは神戸市の支援も得て、令和4年の復旧にようやくスタートが切れた。

(2)南相馬市の概況・歴史など

- ・もともと人口は減少していたが、震災で拍車がかかった。
- ・市域の大部分が山林で、農用地は21%だが、ほぼ水稲。
- ・北に宮城県仙台市、南にいわき市の立地で、福島市まで1時間、郡山市へ1.5時間に位置する。

- ・いわき市までは常磐道の整備が早かったが、震災前は常磐道も開通しておらず、歩道も少ない2車線の国道6号のみで、整備は進んでいない地域であった。鉄道の本数も少ない。
- ・東日本大震災で整備が加速し、アクセスは格段に良くなった。
- ・平均気温12度。市内の浜部までは近く夏涼しいが、内陸部は夏暑い。冬は雪も少ない
- ・田園都市で、水稲中心。漁港は鹿島区にあるが小さい。北にある相馬市原釜への水揚げは多い。
- ・観光は、相馬野馬追が有名。人馬一体のお祭り(神事)で、7月の下旬に開催される。

相馬市を出発し、原野区で最後のイベントの馬事が行われる。千年以上の歴史がある。

- ・主役は当地を治めていた相馬氏。平将門の末裔と言われている。江戸時代は6万石程度と小さい大名の相馬氏だった。伊達政宗と争ったが生き残り、関ヶ原では西軍についたため改易の危機に瀕したが、伊達政宗がとりなして免れたと言われている。明治維新时期まで残った数少ない藩のひとつである。



相馬野馬追南相馬市会場

(3)東日本大震災による被災の様子～天野係長の体験談

①発災直後

- ・震度は6弱。小高区役所は完成後1年程度だったが、とても立っておられず、柱が折れるのではと感じた。
- ・すぐに津波警報が出た。当初は10m以上の予想。
- ・当時は土木課所属で、今考えると、津波警報が出ていたのかかわらず、やってはいけないことだが、海岸方面へ2人組2班体制で北周りと南回りで分かれて見回りに出た。
- ・別班の先輩はちょうど見回りコースに自宅があり、立ち寄ったそうで、祖母と近所の高齢者がいた。2階に避難させたが、津波に会って車も浸かり帰庁できなくなった。連絡ができず、これは津波に飲み込まれたのではないかと心配していた。
- ・水位が下がった時に、近くの小山の上に避難し、翌日へりで救出された。ほとんどが高齢者で十数人位いたようだ。若い人は働きに行っていて、地域にはいなかった。
- ・津波は初めてで、何もわからなかった。道路も通れないところが多かったが、もともと海側の出身でよく道がわかっていたので、なんとか海岸まで行った。
- ・海岸で見守っていると、水位が防潮堤を越え始めた。その時は内陸も浸水するなというくらいの見立てだった。役所に戻ろうとゆっくり走っていると、前方から来た消防車が急に狭い道で切り返し始めた。クラクションを鳴らされて後ろを見ると、松の木を巻き込みながら黒いものが見えた。今思うとそれが津波だった。車のスピードを上げて高台の小学校方面へ逃げた。
- ・ふりかえると国道6号を越えて津波が来ていた。途中ですれ違ったり、残っていた人はどうなったかわからない。

②被災概要

- ・直接犠牲者数1,156人(津波・建物倒壊など)。関連死者数520人。
- ・鹿島海岸への津波到達は15時35分。高さ20.8m。南東方面から波が来た

- ・浸水範囲も広く、内陸3～4 kmまで遡上し JR 常磐線でとまった。
- ・沿岸には水田が多く、集落もあったが、ほとんどが飲み込まれた。
- ・1933年の津波被害は、三陸など北の方が中心で南部ではここまでの被害はなかった。
- ・津波の到来方向に小山など障害物があると直撃を免れるので流されずに家が残っていたりする。
- ・1階は津波が通り過ぎ、破壊されているが、2階は残っている。状況を確認して自衛隊や警察、消防が立入って調査するため撮った写真である。



津波後1か月後 まだ海水が残っている
(南相馬市役所提供)

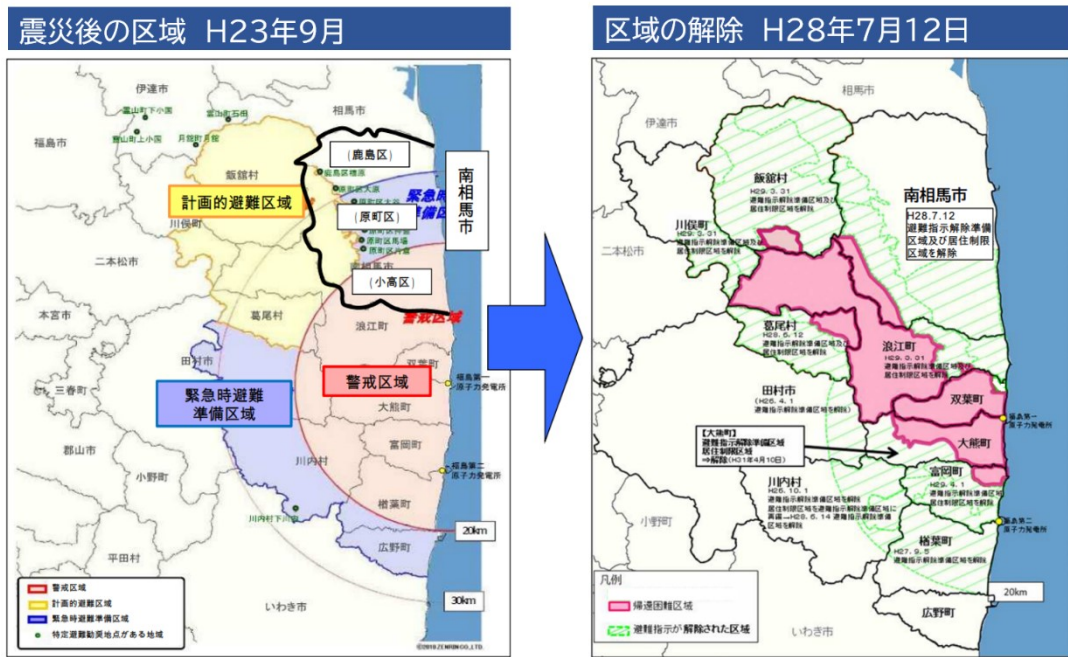
③原発事故被害

- ・3月12日、原子力発電所から10 km圏内に避難指示が出された。小高区の最南部がエリアにかかったため、小高区役所や小中学校へ避難が始まった。自力で移動できない人のために、市役所からバスも出した。すでにガソリンなどが入手困難になり始めていた。
- ・福島第1原発1号機水素爆発までは現地で救出活動をしてきたが、屋内避難した。
- ・ヨウ素剤の確保と配布を検討したが、医師の指示がないと配れない。
- ・夕方、20 km圏内に避難指示が出されたため、避難広報を小高区・原町区（多くは石神地区などへ）に行ったが、なかなか理解を得られない。「なんでにげっぺ？」という反応が大半だった。
- ・現地を回っているうちに小高区役所も閉鎖され鹿島区役所へ移動した。
- ・3月11日、着替えを取りに帰った。実家は井戸水だったので、当面の生活は出来る思い、実家へ避難の予定だったが、家族は鹿島区へ避難、次に福島市方面へ。しかし飯館村などは、結果として線量が多くなったエリアで、内陸は安全だと思っていたが、実は放射能で危険だった。
- ・3月14日 3号機水素爆発により、全市避難を実施。
- ・30 km圏内は屋内避難だったが、物流は麻痺し、ガソリンを受け取りに職員がタンクローリーを運転した例もあった。
- ・当時の市長が SNS で世界に発信し、世界の100人に選ばれることになった。
- ・3月15日までは、ため池の被災状況調査や給水支援を行っていた。
- ・3月15日、バスで市外に避難誘導。1,939人を新潟、群馬などの旅館などへ
- ・自力で移動可能な方はガソリン10リットルを支給し避難を誘導。
- ・遠方へ行けず相馬市へ逃げた人も多い。廃校された相馬女子高跡を使えることになったが、水道も通じておらず、トイレも使えない。避難所として使えるように整備して、4月末くらいまで利用した。
- ・現在はほぼ全域で帰宅困難地域は解除
- ・6年間の避難指示は長かった。帰還状況はR3年3月末で、全市居住人口54,394人(震災時71,561人76.0%)に対し、小高区は3,752人(同12,842人29.2%)。



津波で倒壊家屋のがれきが散乱した臨海エリア

- ・ 帰還者は高齢者が多く、小高区の65歳以上人口率は44.1%(全市36.7%)となっている。

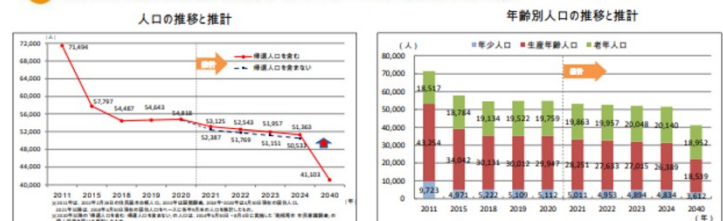


- ・ 放射線対応は未知の世界。いまだに試行錯誤が続いている。
- ・ 原発事故の収束は、まだ見えない。
- ・ 除染は国(環境省)が主導だが、20 km圏外は市で実施(国負担)。実施は大手ゼネコンが行う。
- ・ 平成29年3月末で除染作業は完了。現在は、 $0.078 \mu\text{Sv/h}$ で通常の市街地と変わらない。
- ・ 医療機関の人員確保が難しい。
- ・ 出生数は回復せず。
- ・ 小高区では小学校4校を1校に統合した。
- ・ 被災農地2,722ha(全耕地面積8,400ha)のうち1,782ha(65.5%)を復旧した。
- ・ 仮設住宅(県供給)は全3,300戸を供給。市内30か所(小高区はゼロ)、市外の相馬市や新地町に8か所設置した。令和2年3月末に供与終了し、入居者なし。市内の27か所は撤去完了した。

④南相馬市の課題

- ・ 人口減少と少子超高齢に震災で拍車がかかった。
- ・ 小高地区は人口が激減した。市の人口減少の大半が小高区。
- ・ 産業創出育成
- ・ 都市基盤整備
- ← 次の災害への対応
- ・ 地域活動
- 持続可能なまちづくり

- ① 震災と原発事故の影響により拍車がかかった人口減少時代
- ② 少子時代
- ③ 超高齢時代
- ④ 多様な人材活躍と新たな産業創出・育成時代
- ⑤ 安心・快適に暮らせる都市基盤・環境維持への対応
- ⑥ 地域活動と持続可能なまちづくりに向けた対応



⑤復興総合計画

平成 28 年に避難指示が解除されたことで小高区は復旧がスタートした

- ・旧避難指示区域の再生
- ・移住・定住の促進
- ・小高診療所整備 もと小高病院があったが、閉院したため医療サービスの確保が重要課題
- ・鳥獣被害防止 一時的に人がいなくなったためにバランスが崩れた
- ・ロボットテストフィールド(RTF) 廃炉を含め、多様な用途のロボットの試験ができる施設。「福島イノベーション・コースト構想(※)」に基づき設置された。
- ・子育て世代へ施策
- ・新住民の呼び込み
- ・コミュニティづくり施策 デマンドタクシーに取り組んでいる。

※「福島イノベーション・コースト構想(福島イノベ構想)」

東日本大震災及び原子力災害によって失われた浜通り地域等の産業を回復するため、当該地域の新たな産業基盤の構築を目指す国家プロジェクト。「廃炉」「ロボット・ドローン」「エネルギー・環境・リサイクル」「農林水産業」「医療関連」「航空宇宙」といった重点分野におけるプロジェクトの具体化を進めるとともに、産業集積の実現、教育・人材育成、交流人口の拡大、情報発信等に向けた取組が進められている。

⑥農林水産関係

- ・津波被害の復旧は 40%程度完了。避難指示が出ていたため、復旧事業のスタートが6年後と遅れたため、宮城県などとのギャップがある。
- ・スマート農業への取り組みは進んでいる
- ・農地の被災、農具の被災、家族の被災、高齢化などで農業を辞めた人も多い。自ら営農できないことから、農業法人へ任せる方式も徐々に進んでいる。
- ・小高カントリーE V整備— J A福島などが運営を行っている除湿乾燥施設。
- ・ライスセンター —新しい製品(名産品)の開発にも取り組んでいる

<現地見学>大井～塚原地区 農業法人「紅梅夢ファーム」



小高区大井～塚原地区
・東日本大震災の災害復旧と加速化交付金を活用
・R5年度完成予定(105ha)



現地を視察しながら説明を聞く

Q：建物解体は完了している？

A：津波、地震で被災を受けたものは公費解体された。

避難後に避難先での永住で、元の住家の管理ができなくなったものなどは残っているが、手つかずで残っているものはない

(4)最近の災害対応について 山本洋二氏(28才神戸市派遣職員)より説明

神戸市採用6年目 下水担当 西神NTで生まれた年に阪神淡路大震災で被災

① 水害について

- ・令和元年災 令和元年10月11日～26日 12時間300mmの豪雨
- ・令和4年災 令和4年3月16日発生した福島沖地震(最大震度6強)
- ・災害名に期間がついている珍しいケース
- ・令和元年11月より神戸市より支援職員派遣
- ・70億円超の事業量をこなしている

② 令和元年災対応

- ・田畑の復旧は全127地区で完了(100%) 参考:鹿島区34 原町区44 小高区49
- ・堰の復旧: 鴨佐衛門堰など (洪水で堰が埋まり取水できなくなったため)
- ・農用地等災害復旧事業

砂利1号地区:農地に土砂(砂利)が堆積しており、撤去

受益者(地権者)からの負担金も必要

山間地で畦畔(けいはん)は高低差が大きい(圃場整備は未実施地域)

③ 令和4年災対応

- ・深度6強で2011年より揺れは大きかった印象。
- ・ため池9地区:8月に査定終了
堰堤の堤体クラック:深さ2m程度あった
決壊はなかった(新地町では決壊している)。
- ・江戸中後期に相馬藩の灌漑事業で作られたものが多く、200~300年経過している。
※飢饉の発生で、灌漑事業が必要となり、二宮尊徳の弟子を江戸に派遣し技術を習得させた。



平後ため池(波除ズレ)



石の宮ため池(洪水吐破損)



池袋ため池(法面崩落)